

[原著論文]

ゴシックと模倣—*The Monk*とバラッド詩¹⁾—

中島 久代*

Gothicism and Imitation —Literary Ballads in *The Monk*—

Hisayo NAKASHIMA*

Abstract

In the a notorious Gothic horror novel, *The Monk* published by M. G. Lewis in 1796, ten pieces of poetry written by the author are introduced, of which three are literary ballads: “Durandarte and Belerma” in vol. 1, chap. 2, “The Water-King” in vol. 3, chap.1, and “Alonzo the Brave and Fair Imogine” in vol. 3, chap. 2. These imitated literary ballads not only foretell the tragedies which will happen after they are sung and contribute to intensify the Gothic atmosphere in the novel, but also symbolize the fact that the whole body of the novel is constructed by imitating various pre-texts. The purpose of this paper is to clarify that the literary art of imitation is indispensable to the Gothicism of the novel. The discussion in this paper will be presented through the following topics: 1. how the literary ballads are imitated from the original poems and how they contribute to the scene in which they are set; 2. how they were evaluated by the contemporary critics and advertised on the contemporary media; 3. how German pre-texts and the novel are related; 4. how “Alonzo the Brave and Fair Imogine” is parodied by the author himself.

KEY WORDS : literary ballad, M. G. Lews, Gothicism, imitation, pre-text

1. 本稿の目的と作品概要

M. G. Lewis (1775-1818)の*The Monk* (1796) は、強姦殺人や近親相姦といったショッキングな性的話題を作品中にちりばめて、1796年の出版時には議論の嵐を呼び起こしたゴシック・ホラー小説である。この小説には、序文代わりのホラティウスの模倣詩から最終巻中の“Alonzo the Brave and Fair Imogine”まで、全部で10作のルイスが創作した詩が挿入されているが、第1巻第2章の“Durandarte and Belerma”、第3巻第1章の“The Water-King”、同巻第2章の“Alonzo the Brave and Fair Imogine”はバラッド

詩に分類される作品である。本稿の目的は、これらのバラッド詩がゴシック小説に挿入されることによって果たした役割を、バラッド詩の成立要因である「模倣」という視点から考察することにある。

ストーリーはスペインの高僧Ambrosioの破滅を描く。カプチン修道院の高僧アンブロシオは、高潔な修道僧としてマドリッド中にその名を知られていた。アンブロシオの説教を聞きに群集が修道院に集うところから物語は始まる。貴族Lorenzoも野次馬根性半分で説教に集い、叔母のLeonellaに連れられた清純な少女Antoniaと出会う。

アンブロシオは5才で修道院に来て以来30才まで、修道院内に隠って信仰と禁欲の生活を送ってきたが、名高い高潔さの裏には、傲慢、虚栄心、自己中心主義が巣くっていた。修道院では、正体はMatildaという女性だが、修道僧になりすましたRosarioがアンブロシオに献身的に仕え、寵愛を一身に集めていた。ロザリオが女性だったことを知ったアンブロシオは肉欲を抑えきれず、マチルダとの快楽に身を委ねてしまう。

ロレンゾの妹Agnesは貴族Raymondと恋仲だったが、アグネスは尼僧になる身だとして二人は引き裂かれた。彼女を探し続けてマドリッドの尼僧院にいることを突き止めたレイモンドは、彼の子を宿したアグネスと再度駆け落ちの手筈を整える。しかし、これがアンブロシオと尼僧院長に発覚し、アグネスは尼僧院の地下墓所の牢獄に閉じ込められる。ロレンゾはレイモンドに協力して妹を探すうち、レイモンドの親戚筋のアントニアと再会する。

アンブロシオがマチルダとの快楽に飽きてくると、マチルダは彼をさらなる罪の深みへと誘惑する。母親Elviraの病の治癒を祈願して訪ねて来たアントニアにアンブロシオが欲情すると、マチルダは魔術を使ってその欲望に火を付ける。アントニアの部屋に忍び込んで強姦しようとしたがエルヴィラに見つかり、彼女を殺害する。発覚を怖れたアンブロシオはアントニアに眠り薬を飲ませて尼僧院の地下墓所に閉じ込め、強姦殺害に及ぶ。

アグネス殺害という情報を得たロレンゾは尼僧院長を捕えに出向く。噂は瞬く間に巷に広がり、群衆は暴徒化して、尼僧院長はなぶり殺され、アンブロシオも捕えられる。焼け落ちた尼僧院の地下墓所からアグネスは救出された。しかし、アントニアは駆け付けたロレンゾに抱かれて息を引き取った。

異端審問所での拷問に耐えかね、アンブロシオは罪を告白する。マチルダは魔術ですでに自由の身となっていた。実は彼女は悪魔の手先で、アンブロシオの失墜を画策したのだった。宗教裁判の判決に懊悩するアンブロシオは、マチルダにそそのかされて悪魔に魂を売り渡すと、悪魔は、アントニアはアンブロシオの実の妹で、エルヴィラは実の母親だったことを告げる。悪魔はアンブロシオの頭に爪を立てて彼を牢獄から連れ出し、断崖絶壁の上へと投げ落とした。意識はあっても身体は利かず、一週間虫や野禽に責め苛まれたあげく、アンブロシオは息絶えた。

2. バラッド詩の元歌と物語との絡み

まず、それぞれのバラッド詩が模倣詩であることを確認し、それらと物語がどのように絡められているかを押さえない。

第1巻第2章に挿入されたバラッド詩「デュランダルテとベレルマ」は、ムーア軍との戦いで死にゆく騎士デュランダルデが一族の兵士モンテシノスに、彼の心臓を恋人ベレルマへ形見に贈ってくれるよう遺言を託し、モンテシノスは誓い通りに心臓をえくり出すという物語詩である。ルイスは小説巻頭の‘Advertisement’で、この詩が古いスペインのバラッドからの模倣であると述べているが、この元歌は残念ながら不明である。しかしバラッド・リバイバルの時代を生きたルイスであれば、同種の元歌を英語圏の伝承バラッドに求めることができよう。「デュランダルテとベレルマ」のハイライトはデュランダルテを失ったモンテシノスの嘆きの場面であるが、高潔な武将の死を嘆くこの場面の元歌として、例えば、“The Hunting of the Cheviot”(162B)²⁾が挙げられる。

Then leauing liffe, Erle Percy tooke
the dead man by the hand;
Who said, ‘Erle Dowglas, for thy life,
wold I had lost my land!

‘O Christ! my verry hart doth bleed
for sorrow for thy sake,
For sure, a more redoubted knight
mischance cold neuer take.’ (sts. 38-9)

兵士たちの命を惜しんで武将同士の一騎打ちで決着を付けようとしたパーシイは、敵ながらあっぱれの武将ダグラスの死を嘆いて、「おまえの命が救えるならば／わしの領地すべて捨ててもかまわない／ああ おまえの死を悲しんで／わしの心臓が血を流す」³⁾と慟哭する。このような武将の誉れと死の嘆きの場面が模倣された「デュランダルテとベレルマ」は、マチルダが毒蛇に噛まれて病の床についたアンブロシオを慰めるためにうたったのだが、死に臨んでのヒロイズム、心臓をえくり出す描写のおぞましさ、語り手の感傷性がアンブロシオの感傷癖に拍車をかけ、マチルダとの戒律破りの性愛に至る予兆として、小説のゴシズムを盛り上げている。

第3巻第1章の「水の王」は、水の王が人間の乙女

を手に入れるべく、馬に乗った騎士に変身して乙女を川で溺死させるという物語である。このバラッド詩はドイツ詩人Johann Gottfried von Herder (1744-1803)の“Der Wassermann”(1779)をルイスが翻訳した作品である。溺死というモチーフは英語圏の伝承バラッドでは“The Mother’s Malison, or, Clyde’s Water”(216C)などで頻繁にうたわれる。

The first an step that she steppd in,
She stepped to the queet;
‘Ohon, alas!’ said that lady,
‘This water’s wondrous deep.’

The next an step that she waded in,
She wadit to the knee;
Says she, ‘I coud wide farther in,
If I my love coud see.’

The next an step that she waded in,
She wadit to the chin;
The deepest pot in Clyde’s water
She got sweet Willie in. (sts. 26-8)

ウィリーの母親は息子とマギーとの恋仲が気に入らず、呪をかけてウィリーをクライド川で溺死させ、マギーは行方の知れないウィリーを探してクライド川へやって来た。「一步足を踏み入れたとき／水は踵の深さです」、「またもう一步踏み入れたとき／水は膝の深さです」、「またもう一步踏み入れたとき／水は顎の深さです」と、川の水が足、膝、胸と上がってくる恐怖感がうたわれ、マギーも溺死して川底で恋人と再会する。「水の王」が使われているのは、アグネスの消息を探す小姓Theodoreが、尼僧院の前で、昔彼女から教えてもらったこの歌を、彼女が生きていたら何らかの反応があることを期待してうたうという場面である。テオドーレ自ら説明しているように、乙女が情熱に溺れることの危険をうたったこの詩は、地下墓所に作られた牢屋での幽閉と出産というアグネスの受難を予告し、「デュランダルテとベレルマ」同様に小説のゴシズムを盛り上げている。

第3巻第2章の「勇者アロンゾと美しいイモジン」は、戦地パレスチナへ行った恋人を裏切ったイモジンの婚礼の席に亡霊となったアロンゾが現れ、イモジンを地中へ連れ去るという物語で、ドイツ詩人Gottfried August Bürger (1747-94)の“Lenore”(1773)から、騎

士装束の亡霊が花嫁を墓場へ連れ去るというモチーフが模倣されている。以下はウィルヘルムの亡霊がレノーレを墓場へ誘う場面である。下の英文はこのスタンザの概要を示す。

«Achi Wolltest hundert Meilen noch
Mich heut’ins Brautbett tragen?
Und horch! es brummt die Glocke noch,
Die elf schon angeschlagen.»—
«Sieh hin, sieh her! der Mond scheint hell.
Wir und die Toten reiten schnell.
Ich bringe dich, zur Wette,
Noch heut’ins Hochzeitbette.»— (st. 17)

‘What, would you want to take me a hundred miles today to our bridal bed? And listen, the bell is still booming, it has already begun to strike eleven!’
‘That’s neither here nor there, the moon is shining bright. We and the dead ride quickly. I’ll bring you, I’ll wager, to your marriage bed before tomorrow!’⁴⁰

「勇者アロンゾと美しいイモジン」は、アントニアが叔母レオネラの到着を真夜中ひとり待つ場面で挿入されており、花嫁イモジンの恐怖と苦悩は、アンブロシオによる偽装毒殺と地下墓所での強姦殺人というアントニアの恐怖と苦悩の予告となっている。

このように、それぞれのバラッド詩は挿入された場面に降に起る事件を予告し、小説のゴシズムを盛り上げる役割を負っているが、バラッド詩は小説の脇役に徹したのみではない。というのは、挿入された一連の詩について、小説から独立しての評価や広告が存在するからである。

3. バラッド詩の評価と広告

スコットランド詩人Sir Walter Scott (1771-1832)は『マンク』中のバラッド詩を評価したひとりである。彼は“Essay on Imitations of the Ancient Ballad”(written in April, 1830)において、次のようにルイスと彼のバラッド詩について語っている。

The person who first attempted to introduce something like the German taste into English fictitious, dramatic, and poetical composition, although his works when first published

engaged general attention, is now comparatively forgotten. I mean Matthew Gregory Lewis, whose character and literary history are so immediately connected with the subject of which I am treating that a few authentic particulars may be here inserted by one to whom he was well known.⁵⁵⁾

スコットは「ドイツ風なものイギリスの小説、演劇、詩への紹介を初めて行ったのは、(1830年時点で)今や忘れ去られたM. G. ルイスであり、ルイスは私が(伝承バラッドの摸倣という創作において)やろうとしているテーマと密接に関わっているのだ」と述べて、ドイツ・ロマン派のイギリスへの輸入という文学史上の意義と、Thomas Percy (1729-1811)編纂の*Reliques of Ancient English Poetry* (1765)によって引き起こされたバラッド・リバイバルの担い手としての意義を強調している。

また、William Hazlitt (1778-1830)もルイスのバラッド詩の評価者であった。

Some of his descriptions are chargeable with unpardonable grossness, but the pieces of poetry interspersed in this far-famed novel, such as the fight of Roncevalles and the Exile, in particular, have a romantic and delightful harmony, such as might be chaunted by the moonlight pilgrim, or might lull the dreaming mariner on summer seas.⁶⁾

ハズリットは、「この悪名高い小説に挿入された詩は、月夜に巡礼がうたうような、あるいは、夏の海に漕ぎ出した夢見る水夫が口ずさむような、ロマンティックで心地よい調和を感じさせる」と述べて、残虐性と嫌悪感に満ちたこの小説の清涼剤としての役割を詩に見出している。

この小説の出版事情を調べたAndré Parreauxによれば、「勇者アロンゾと美しいイモジン」は複数回に渡って新聞雑誌に単独掲載されており、以下のようにまとめられる。⁷⁾

1796年 7月 *The Morning Chronicle*
8月 *The Star*
The Lady's Magazine
9月 *The Gentleman's Magazine*

10月 *The Scots Magazine*
The Free-Mason's Magazine
The Monthly Mirror
11月 *The Walker's Hibernian Magazine*
1797年 *The Annual Register*
The Spirit of the Public Journals
Poetry Original and Selected (vol. II)

「勇者アロンゾと美しいイモジン」は1796年7月の新聞*The Morning Chronicle*を皮切りに、ほぼ毎月のように単独で新聞雑誌に掲載され、1797年には、8ページ1ペニーで売られたチャップブック*Poetry Original and Selected*に取り上げられている。さらに、小説の初版が匿名で発行された1796年3月12日土曜日の*The Star*紙には、小説中の詩のタイトルをすべて列挙してそれらの存在を強調した宣伝が掲載されている。以下はその宣伝文のコピーである。

This Day was published, in 3 vols. price 10s. 6d. sewed,
THE MONK, a ROMANCE, interspersed
with the following Pieces of Poetry:
PREFACE, in imitation of Horace.
GIPSEY's SONG.
LOVE and AGE.
MIDNIGHT HYMN.
SERENADE.
INSCRIPTION in an HERMITAGE.
DURANDARTE and BELERMA.
THE EXILE.
THE WATER-KING.
ALONZO, the BRAVE and FAIR IMOGENE.
Dreams, Magic Terrors, Spells of Mighty Power.
Witches and Ghosts, who rove at midnight hour.
Printed for J. Bell, No. 148, Oxford-Street, and C.
Law, No. 14, Ave Maria lane.⁸⁾

これらの評価と出版事情からうかがえるのは、『マンク』の人気は卓越したゴシズムだけではなく、詩の独立した面白さと、摸倣詩の目新しさや面白さにも拠っていたという事実である。

4. 一群のpre-texts

摸倣という創作行為は、実は『マンク』の構造全体が十二分に表明しているところでもある。小説冒頭の

「結言」でルイスは「剽窃は自分で承知しているし、言及した以外にもっと多く発見されるだろう」と述べているが、この挑発に応えるべく、『マンク』のpre-textsについてはすでに十分に調べ上げられている。

メインプロットは、Richard Steele (1672-1729)によって、1713年、雑誌*The Guardian*に掲載された道徳寓話“The History of Santon Barsisa”に基づくものである。以下の引用は、聖パーシサが悪魔の誘惑で禁欲の戒律を破る場面である。

How weak is Man! The Santon followed the Devil's Advice, and did what he suggested to him. But the Officers, before they would yield to leave the Princess, sent one of their Number to know the King's Pleasure. That Monarch, who had an entire Confidence in Barsisa, never in the least scrupled the trusting of his Daughter with him. *I consent*, said he, *that she stay with that Holy Man, and that he keep her as long as he pleases: I am wholly satisfy'd on that Head.* [...] Night being come, the Devil presented himself to the Santon, saying, *Canst thou let slip so favourable an Opportunity with so charming a Creature?* [...] The unfortunate Barsisa was so weak as to hearken to the Enemy of Mankind. He approach'd the Princess, took her into his Arms, and in a Moment cancell'd a Virtue of an hundred Years Duration.⁹⁾

この物語自体は聖パーシサが悪魔の誘惑により禁欲の戒律を破ったため絞首刑になるという100行足らずの寓話である。悪魔に魂を売り渡す聖職者、禁欲と肉欲の葛藤という要点において、アンブロシオと聖パーシサは瓜二つである。

『マンク』冒頭でロレンゾは恋人アントニアが悪魔に陵辱されるという、物語を象徴する夢を見ているが、その夢は、Samuel Richardson (1689-1761)作の書簡体小説*Clarissa* (1747)の結末で、登場人物のひとりLovelaceが見た夢の概要が模倣されている。

I lost sight of her, and of the bright form together, [...] And then (horrid to relate!) the floor sinking under me, as the ceiling had opened for her, I dropped into a hole more frightful than that of Elden and tumbling over

and over down it, without view of a bottom, I awaked in a panic; [...] as if my dream had been reality.¹⁰⁾

また、ドイツ文学に造詣が深かったルイスは、Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832)の*Faust: Ein Fragment* (1790)を筆頭に、J. C. F. von Schiller (1759-1805)の*Der Geisterseher* (1787-89)、Lorenz Flammenberg (1765-1813)の*Der Geisterbanner* (1792)などの、いくつものドイツ文学のpre-textsからプロットとモチーフを援用している。以下に、先行研究からルイスのドイツ文学からの模倣と『マンク』での使われた方を簡単にまとめている。¹¹⁾

- (1) Johann Wolfgang von Goethe, *Faust: Ein Fragment* (『ファウスト』)
→ 悪魔と魂の売買の契約、アンブロシオのアントニア誘惑
- (2) J. C. F. von Schiller, *Der Geisterseher* (『亡霊の占師』)
→ アンブロシオの性格付け、‘Wandering Jew’の人物像
- (3) Lorenz Flammenberg, *Der Geisterbanner* (『妖術師』)
→ レイモンドの盗賊軍団との対決、レイモンドの‘Bleeding Nun’との道行き
- (4) Viet Weber (Leonhard Wächter, 1762-1837), *Die Teufelsbeschwörung* (1791) (『悪魔払い』)
→ アンブロシオの死
- (5) *Volksmärchen der Deutschen* (1782-86) (『ドイツ民話集』): Johann Karl August Musäus (1735-87), “Die Entführung” (『駆け落ち』)
→ レイモンドの‘Bleeding Nun’との道行き
- (6) Christian Friedrich Daniel Schubarth (1739-91), “Der ewige Jude” (『永遠のユダヤ人』)
→ ‘Wandering Jew’の人物像

スコットはルイスのこのようなドイツ文学の模倣のオンパレードを‘peccadillo’(軽犯罪)と羨望を込めて呼んだが、¹²⁾一群のpre-textsの援用によってこそ、この小説はゴシシズムの醍醐味を発揮していることは明らかである。

以上のまとめから、この小説は、模倣詩とpre-texts

の援用とのコンビネーションによって構築されたバスターシーシュの文学とすることができる。ルイスは模倣としての創作という原始的かつ斬新な芸術行為をゴシシズムをテーマに展開しているのである。小説中のバラッド詩は、ルイスの模倣の技が小説のゴシシズムを支えていることを象徴的に示していよう。

5. パロディ化

バラッド・リバイバルの中で爛熟したバラッド詩は、先行作品の人物や構造を模倣しユーモラスな効果を狙って作り変えるパロディ化の傾向を示したが、『マンク』のバラッド詩も例外ではなかった。先述した Parreaux の調査によれば、1799年3月の *The Monthly Visitor* 誌には「勇者アロンゾと美しいイモジン」のパロディ “A baker so gay and his lady so sweet” が掲載され、同年6月には “Young Damon and Phillis” というパロディが刊行されたという。¹³⁾ さらに注目したいのは、ルイス自らが「勇者アロンゾと美しいイモジン」をパロディ化した模倣詩 “Giles Jollup the Grave and Brown Sally Green” を書き、1798年の第4版に「勇者アロンゾと美しいイモジン」の詩の脚注として付けていることである。色黒のサリーは薬剤師のジャイルズを裏切って結婚式を挙げる。「もしも私があなたを裏切ったら、あなたの亡霊が婚礼の宴会で食べ過ぎた花嫁に下剤をのませて、墓場へ連れて行くでしょう」というジャイルズへの誓いを破り、花嫁サリーは婚礼の宴会で休むことなく食べ続け、そこに1時の鐘が鳴る。鐘の音とともにジャイルズの亡霊が現れ、サリーの裏切りを非難する。

And now the roast beef had been blessed by
the priest,

To cram now the guests had begun:

Tooth and nail like a wolf fell the bride on
the feast;

Nor yet had the clash of her knife and fork
ceased,

When a bell ('twas a dustman's) tolled —
“one!” (st. 7)

“Behold me, thou jilt-flirt! behold me!” he
cried;

“You've broken the faith which you gavel
God grants, that, to punish your falsehood

and pride,

Over-eating should give you a pain in your
side:

Come, swallow this rhubarb! I'll physic the
bride,

And send her well-dosed to the grave!”
(st. 13)¹⁴⁾

サリーが誓った通りに、ジャイルズは下剤をのませて花嫁を異界へと連れ去るといふ、抱腹絶倒のパロディが仕立てられている。サリーのアイディアの出所は『マンク』のコミック・リリーフ的な役どころ、アントニアの叔母レオネラではないか。彼女がようやく見つけた結婚相手は薬剤師であった。

ゴシック・バラッド詩のパロディ化について、A. B. Friedman は次のように述べている。

The Gothic ballads were only possible because an era of enlightenment separated them from the period when demons, witches, and miscellaneous apparitions were taken seriously. They could not have been written, and certainly they would not have been read with pleasure, at a time when such supernatural manifestations were felt as a real presence. By the same token, the balladists had no real faith in their ghostly imaginings; indeed, their conscious intention was to create something “spooky,” not to inspire their readers with awe. Necessarily, therefore, there is an air of insincerity and self-consciousness about these ballads that makes them totter precariously on the brink of burlesque, and their feverish sensationalism does not help their balance.¹⁵⁾

フリードマンによれば、ゴシック・バラッドが成立したのは、超自然現象が真剣に受け取られなくなった啓蒙の時代だからこそであり、バラッド詩人たちの創作は何かしら気味が悪いものを描くということを自覚した上での行為であるから、結果的にその精神がパレースクやパロディへ行き着くまでにそれほど時間はかからないという。とすれば、ルイスは、ゴシシズムの模倣の行き着く先のパロディを自ら率先して示したことになる。

パロディ・バラッド詩まで視野に入れば、ゴシシ

ズムと模倣の結びつきは半ば必然的であることが明らかになったと思われる。意図的な模倣を前提として公言し、パロディ化を孕む小説『マンク』のゴシズムは、模倣という芸術行為が産んだ作品と位置付けることができる。

Accepted date 2011年1月12日

【注】

- 1) 本稿は、日本バラッド協会第3回会合（京都大学吉田キャンパス，2010年3月28日）でのシンポジウム「小説の中のバラッド—ルイス，シェリー，ハーディ，カシュナーはどのようにバラッドを使ったか—」において，中島が担当した「ゴシズムと模倣—*The Monk*とバラッド詩—」に加筆修正したものである。
- 2) 本稿中の伝承バラッドの引用はF. J. Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, 5vols. (1965; rpt. New York: Dover Publications, Inc., 2003)による。作品名後の数字とアルファベットはチャイルド番号と版を示す。
- 3) 本稿中の伝承バラッドの翻訳は，中島久代・薮下卓郎・山中光義監修，バラッド研究会翻訳『全訳チャイルド・バラッド』全3巻（音羽書房鶴見書店，2005-06年）による。
- 4) *The Penguin Book of German Verse*, introduced and ed. Leonard Forster (Harmondsworth : Penguin, 1959) 184-85.
- 5) Sir Walter Scott, ed., *Minstrelsy of the Scottish Border*, ed. Thomas Henderson (London : Harrap, 1931) 550-51.
- 6) William Hazlitt, *Lectures on the English Comic Writers* (New York : Wiley and Putnam, 1845) 150.
- 7) André Parreaux, *The Publication of the Monk: A Literary Event 1796-1798* (Paris: Didier, 1960) 50-52.
- 8) Parreaux 53.
- 9) Richard Steele, "The History of Santon Barsisa", *The Gaurdian* 148 (Monday 31 August 1713), cited in M. G. Lewis, *The Monk*, ed. D. L. Macdonald & Kathleen Scherf (Canada : Broadview Press, 2004) 366.
- 10) Samuel Richardson, *Clarissa; or The History of a Young Lady* (1747-8), ed. Angus Ross (Harmondsworth : Penguin, 2004) 1218.
- 11) Cf. *The Monk*, ed. Macdonald & Scherf; Sydney M. Cogner, *Matthew G. Lewis, Charles Robert Maturin and the Germans* (New York : Arno Press, 1980).
- 12) *Minstrelsy* 552.
- 13) Parreaux 57.
- 14) M. G. Lewis, *Tales of Terror and Wonder* (London : G-Routledge, 1887) 129-30.
- 15) Albert B. Friedman, *The Ballad Revival: Studies in the Influence of Popular on Sophisticated Poetry* (Chicago UP, 1961) 289-90.